

られて鹽釜明神に伴はれ、そこで書いた繪卷物は今でも残つて居ります。「浦之餘波」と云ふのがそれですが、其他に「公餘探勝」と云ふのもあります。華山は山水のほか肖像畫の上に受けたので、とにかく新しい一派であります。

次に浮世繪ですが、之は寶暦年間に奥村政信が浮繪をかいた。之は洋畫の遠近法を利用して奥深く見ゆる法であつて、芝居の春景の書き方は之であります。殊に風景室内繪にして之を版畫として賣り廣めました。

風景畫の方で感化をうけたのは、一立齋廣重である。之は確かに從來の日本畫に於て見られぬ畫き方である。此人は幾分所謂空氣を畫きいたそうとしてゐた事が認められます。

之等の三種の畫派を總括して考へて見れば、是等は近世に於ける日本畫派の大部分であつて、洋畫と日本畫との關係は案外親密である事が知れます。次に如何なる西洋畫家若くば畫派が感化を及ぼしたかを考へて見ますに、日本畫に及した感化は特別な西洋の畫家、若くば畫派としての感化があらはれて居ないといふ事は注意すべき事である。是れは兩者の差異が大である爲にデリケートの點まで影響を及し得ないので、根本的の相違のみが影響したのであります。即ちそれは

1 陰影法と

2 遠近法

とでありまして此二つが如何に影響したか問題となるに過ぎないのであります。

陰影法は日本畫に其後大なる影響を及しませんでした、其一は日本人が之についてあまり興味を持たなかつた事と、二はそれほど實寫的にすることは却つて畫の品位をさげるものと考へた事によります。されど遠近法は大なる影響を及ぼしました。東西兩洋畫の差は大に此點に存するもので之を利用する事は大部分の人が氣がついたらしいのであります。想ふに此二つは洋畫と日本畫とを比較するに最も面白い點であつて、洋畫から日本畫を見て心附くのは陰影のなき事、遠近の不十分な事であります。此二點が洋畫を見る上にも日本畫を考ふる上にも兩者を比較する上にも最も大切な事であると思ひます。

便所に就て

竹の島 茂 郎

文字は其の組み合せ方によつて種々の意味を持つものであるが、便所の便も其の一例であつて、之を殿と組めば畏多い場所となり、之を所と組めば不淨場となるのである。偕も此の穢はしい場所に使の字を付けた理由は何れにあるか、大小便の用を果す所と云ふ意から來たとすれば一應尤であるが、是等の排泄に使の字をなせ用ひたかと云ふて、矢張其の理由は分らぬ。併し字義の研

究は之を他日に譲ることゝして、我々は既に斯様な文字が用ひられてある以上は、此の字から深き教を導き出さねばならぬ。

余は便所の便は便利の便と解したい。赴く上にも掃除する上にも其の他如何なることにも至極便利を旨とすべき暗示であると解したい。世間では便所を大なる不淨場として之を遠ざくべきものと考へて居るが、若し左様なことがあると云ふと大なる不便を起すものであつて、雨風の夜とか又は冬の寒空であるとか、或は又子供病人等が不時に急を告げた様な場合に、大なる差支を生ずることは敢て説明を要しないのである。又便所を遠ざけてあると云ふと、掃除するに億怯であつて、平生目につかぬ所から自然不潔にながれやすく、又不潔になつても住居に迷惑を及ぼさぬゆゑ、我慢しながらも用をすませば後はそのまゝになると云ふ様な次第で、衛生に危害を及ぼすことも甚だ少くないのである。一躰清潔と云ふ事は何も居間や客間ばかりに必用なことではないのであつて、寧ろ便所の様な常に不潔物があつて、而も甚だ不潔になりやすい所を清潔にすべきが肝腎なのである。夫故不淨場だの隔離だのと云ふ考は全然之を去つて、在來のものに改良を加へ母家に接続せしめて、徹頭徹尾便利の場所たらしむる様に致したい。

余は廁所と臺所とは一家の内で最要の場所であると云ふことを敢て云いたいのである。然るに従來は客間だの床の間だのと云ふ様な、無くともすむ様な場所に無暗に力を入れて、之等最要の場所の研究には一向力を用ひて居ない様に思ふ。余輩の眼を以て見ると我國の便所は彼の二本の木を架して足場を作り、下を掘つて汚物を溜め、周りを圍つて見えをかくしたと云ふ原始的のものから如何程の改良が行はれてあるかを認むることは出来ない。

さりとして之を西洋風に改めて、水で汚物を洗ひ流すと云ふ様な改良は、汚物を肥料とする我國に於ては——たとひ流したものを他に貯へて置くにしても、水にて嵩だかとなるがため、運搬に勞多くして農夫は喜ばないから——之を今日の場合に實行することは甚だ六ヶしい。依て我國は我國流に改良を加ふるより外に致し方はないと思ふ。余は此の點に於て年來懷抱して居る考案を左に掲げよう。

改良の第一段……蓋と筒

我國の便所に於て第一に改良したいのは、樋箱に蓋を設くることゝ、換氣筒(臭氣抜)を立つる事である。

蓋 風呂桶にも蓋があり、飯櫃にも蓋があり、其の他多くの容物には何れも其の口に蓋を設くる世の中に、獨り汚物を入れる、樋箱の口に蓋を設けぬと云ふのは何たることであろうか。此所に蓋を設けぬ爲に、室内(便所)は臭くなるのであるし、又夏期は汚物に蛆がわくのである。而も此の蛆!やがては羽化して臺所に出て來て我々の食物にむらがり、里に歸つては又仔を産み、斯くて

代を重ねつゝあるものなることを思ふたならば、此の樋箱に蓋を設けずしては食物の清潔は勿論家庭の衛生は到底望まれないのである。

樋箱の蓋には自動開閉器を装置したる至極重寶なものもあるやうであるが、斯様なものは高價であるのと破損した場合の修繕の困難なことゝの爲に奨励することの出来ぬ品である。夫故まづ板片に少し長い取手を付けた様なもので十分であると思ふ。

換氣筒 換氣筒は樋箱に蓋を設けると同時に、必ず備ふべき筈のものであるが、世間にはたまたま樋箱に蓋を設けても換氣筒を立つることをしない爲に、使用に際し蓋をとるとこもつて居た床下の臭氣が忽ち込みあげて來るから甚だしい迷惑を被るのである。

換氣筒は經り三四寸のトタン製の筒であつて、之を床下二三寸の所から高く屋根上に突き立て、汚物から發生する臭氣を絶えず抜き去る仕組である、即ちアンモニヤ瓦斯は空氣より軽いものであるから、斯様な筒を設けてやると丁度竈に烟突を設けて烟をぬくと同じ様な工合に、十分に臭氣を抜き去ることが出来るのである。併しなほ十分を望めば筒の上端に風を利用して、一層臭氣を除き去る様な工夫を施し、且つなるべく此の換氣筒を兩便所の中隔に立て、其の中程の所を火袋とし、兩側に硝子戸をはめて、中に金網の柵を作り、來客等の場合にランプを此の金網の上に置くことゝすれば、兩便所を適當に照すと共に一層換氣をすゝむるがゆゑ、其の結果は愈々

土首尾に行くのである。



甲



換氣筒の上端に施すべき工夫は外觀甲圖の如く、鼓形で兩端開きたる金具にして、aと符號を付けたのは傘の用をかぬるものである。又乙圖は同じ部分の縦斷面で、點線は傘と金具とを筒に取り付くる棒を示したのである、此の金具を用ふるときは、氣流の關係上如何なる風向に於ても換氣筒内の臭氣を十分に抜き去ることは出来るのである。但し氣流の關係を説明することは他日の好機をまつことゝする。

改良の第二段……汚物溜と掃除口

汚物溜として腐朽性の桶を用ふるが如きは言語同斷である。たとひ耐久性の瓶を用ふるにしても汚物に液牀の多き時屢々筆にすべからざる不都合を起すことがあつて、之等の危難をのがれんが爲に慘憺たる苦心を要することあるを如何せんとするか。而も都會等に於て掃除口は盜賊の侵入口となる虞ありとして成るべく之を小さくする傾あるがため、底深き瓶から汚物を汲み出すことは甚だ不便であつて、之がため掃除口は兎角汚れ勝となり、蓋に故障が起りやすく、又繕ひの億性なる所から、愈々床下の有象無象は姿をあらはすことは多いのである。之等のことを考へると我々同胞は餘りに無頓着であると云はねばならぬ。

而して此の點に就て余の考案は、まづ汚物溜を漆喰又はセメントにてかため、一壁を斜に作つて汚物は常に之を添ひ滑り下る様にし……急勾配なれば大抵溜る虞はないのであるが、なほ十分を望めば此の斜面の部にガラスをはめ込むか、又は此の斜面に小水の注がる、様に、樋箱を改良すれば宣しい……而して汚物溜の半ばは床下から外にはみ出る様にして、こゝに蝶番の上げ蓋を用意すれば、先きにあげたる凡ての不便を除き去ることは出来ると思ふのである。

改良の第三段……窓

従來便所の窓を云へば、小さきものときまつて居る様であるが、之は恐らく便所は臭氣の源であるから、窓を大きく開けば住居に迷惑を及ぼすであろうと云ふ掛念から來たことであろうと思ふが、併し窓が小さい爲、第一には便所内の風すきがわるく、臭氣がいやが上にこもつて目も口もあてい居られぬと云ふ有様となり、自然早く用をすまさんとして不自然なことを敢てし、健康を傷ふ虞を生ずる。第二には室内が薄暗いところから、甚しく不潔にながる、虞を生ずる。又第三には小さき窓を兩便所とも躰裁上同じ高さに作るところから、小便所に於て適當な高さは、大便所に於ては姿勢の違ふところから高きに過ぎて、丁度井戸の底へでもはいつた様な心持になつて甚だ面白くないのである。そこで第一の改良で以て臭氣を根絶すると共に、窓を大きくあけて此等の不便を除く様にすべきである。

改良の第四段……戸口の栓

戸口の栓は家庭用等では従來のまゝ、さしたる不都合もない様であるが、夫とても人の使用中をあけて御互に迷惑をすることも少くないのであつて、共同の便所に於ては殊にかゝる掛念が多いのである、そこで外から戸をたゞいたり、聲をかけたり、透き間からのぞいて見たりする様な不體裁を敢てして、而も一向改良しやうとつとめないのは、何たるのんきであらう。近頃大きな停車場等では外國人の考案を取つて、此の不都合を除いた便所もあるが、之を一般に應用するのは少し面倒である。そこで余は簡便なる次の様な改良を提供するのである。

それは之迄でも時々宿屋等の便所に見る様に、内外共用の栓の外に内部専用のもを設くるのであるが、併し此の内部専用のものには、其の栓と共に動くところの幅四寸長五寸ばかりの板片を付けて、此の板片に對する表の戸を板片の半幅だけ（長さは板片と同長）切り開きて内の栓を進めたる時は板片の一半、栓を退けたる時は他の一半が此の切目に現はる、様にし、其の進めたる時現はる、方を赤く塗つて使用中と云ふ文字を記し、他は板目のまゝ、にのこし置く様に改良せんことを主張するのである。即ち斯様に改良する時は内に入りて内用の栓を進めたる時は、赤地に記されたる使用中の文字外に現はる、がゆるぎに、外來のものは一目して之を知ることを得べく（若不注意にて手をかけても勿論明く虞れはないのであるが）用をすませて出でたる時は内部の栓退

けるがゆゑ、さきの文字自らかくれて明いて居ることは明瞭になるのである。何と簡便なる改良ではないか。

以上の考案になれる便所の改良圖は、余の著したる女學校用家事教科書にあり、つきて見らるべし。

肉の煮方に就て

肉を料理いたしますときに、なるべく其滋養分や美味を肉の外に出さないやうにするため、之を水から煮ることはなく、煮沸した汁の中に入れて煮、之に反してツツプをつくるには、なるべく味や滋養分を汁の中に出すために、水から多くの時間をかけて煮出すといふ事は一般に知られて居る事でございます。即此二つの異つた煮方によつて、大層汁の中に出る養分の上に相違が著しいやうに考へられて居ります。所が亞米利加のグリンドレー博士の研究によりますと、これはあまり相違がなし、却て肉の切り方の大小によつては同じ煮方をしてても大層異つた結果を得るといふことであります。それで從來信せられて居た事と、此研究報告との關係を確かめたいために、次の様な實驗をいたしました。脂肪身の少ない上等の牛肉四百瓦を四等分して、百瓦宛とし其二

つは大きく切り(百瓦を八片となす)他の二つは薄く且つ細かく切り、夫々次の様な煮方をいたしました。

甲 (一) 大切肉 水二百立方センチ宛を二の器に取り其れに各(一)(二)の肉を入れて火にかけ沸騰をはじめてより五分間許り煮て箸の通るを度として共に火より去る

乙 (三) 大切肉 水二百立方センチ宛を沸騰せしめおき、其中に急に(三)(四)の肉を入れる、然るときは一時沸騰止むによりて更に沸騰せしめ(甲)と同じ程度の軟かさに至るまで煮て共に火より去る。

以上二種の肉の煮方に就て其経過を観察するに、御存じの様に水より入れたものは、はじめ肉中の可溶性蛋白質其他溶解成分は皆溶け出しますが、温度が昇るに従つて其溶解したものの、一部分は更に凝固をはじめ、液は甚だ濁たものになります。併し沸騰するやうになると凝固すべきものは皆凝固しつくして、煮汁は黄色を帯びた透明なものになります。甲の中でも肉を細かく切つた方は大切のものにくらべて、著しく其液の濁りの度強く、其溶解物の多くあらうといふ事は、其液の色によつても想像される程であります。また其透明になつた液について見ても(二)は(一)よりも濃い黄色を呈して居ります。

煮沸水中に入れたもの即ち乙の方は、兩者とも直に外面の蛋白質が凝固をはじめるために、表面は白色を帯び甲の方とは餘程様子が違ひますが、併し急に入れた時に溶け出たものが、更に凝固